「孤 立」と「独 立」
——小林秀雄の「孤独」——

（63年8月24日　受理）

金　山　　誠

"Koritsu" and "Kodoku"
—"Kodoku" in Hideo Kobayashi—

Makoto Kanayama

Abstract

It is said that the word "Kodoku" or isolation is one of the most important key words when we read the works of Hideo Kobayashi. What does "Kodoku" mean ? In my viewpoint the word "Kodoku" Kobayashi uses practically means "Koritsu" or solitude, which is very negative. I will consider this subject here.

序　　章

拙稿「『強い個性』と小林秀雄」において私は，小林の「罪と罰」論を分析し，その究極観念として「強い個性」（「Xへの手紙」の中の言葉）ともいうべきものを抽出した。例えば昭和9年執筆「罪と罰Ⅰ」で小林は，主人公ラスコオリニコフの「暗い孤独感」に的を絞り，それを究きつめて次のような場所にラスコオリニコフを導く。

感情も意志も思想も彼を支へるに足りぬ，彼は人間といふよりも寧ろ感受性の一つの場所と化してゐる。（中略）殺人の経験は彼に何ものも教へてはくれなかった。彼はただ20コペイカの銀貨をネヴァ河に投げ込む事を学んだ。（中略）彼は孤を抱いてうろつく。そして現実が傍若無人にこの中を横行するに委せるのだ。彼はただこれに堪へ忍ぶ。

これは「罪と罰Ⅰ」の結語だが，小林は昭和23年執筆「罪と罰Ⅱ」の結語でも「一切の人間的なものの孤立と不安を語る異様な（これこそ真に異様である）背光を背負ってゐる」と書いて，同じ場所に言及している。その場所というのは，人間が，通常社会的存在として共通の制

度や共通の尺度で身を包んで生きている状態を離れ，言わば「生ま身を曝す」（「Xへの手紙」の言葉）存在となる地点のことであり，現実が突如不可解なものに変じて，人間を脅かすに至る事態のことである。ラスコオリニコフの「一つの感受性の場所と化し」「孤を抱いて」「現実が傍若無人にこの中を横行するに委せる」というのがたとえばそれであり，そのような人間のあり方が「強い個性」と呼ばれるものと思われるのである。

昭和７年執筆「Xへの手紙」に，「強い個性」の認識論的構造についての言及がある。

社会のあるがままの錯乱と矛盾とをそのまま受納する事に堪へる個性を強い個性といふ。彼の眼と現実の間には，何ら理論的媒介物はない。（中略）かういふ精神の果しない複雑の保持，これが本当の意味の孤独なのである。

小林は同じパラグラフで，社会の「一種非人間的な組織」や「機構」に言及し，人間がそのなかで「浅薄な関係を結び合ひ，架空な言葉を交換し合ふ強い習慣」を断罪しているが，引用中の「本当の意味の孤独」即ち「強い個性」が，その「習慣」の対極に位置づけられていることは明らかである。「強い個性」というのは，社会的存在と違い，例えば「理論」のような「媒介物」――共通の制度・尺度（所謂「コード」）を拒絶して孤立し，ただ「現実が傍若無人にこの中を横行する」のに「堪へ忍ぶ」（「罪と罰Ⅰ」の言葉）存在なのである。

拙稿ではこの「強い個性」について次のようにも書いた。

第一章や第二章において私は，小林の思想の核心に迫る指標を求めて，「懐疑」や「否定」や「ニヒリズム」・「孤独感」や「孤島」といったものに注目して来た。それを背負って立つものとして「強い個性」を考えてきた。（中略）河上氏によれば，泰子の「意識の紐の片端」を小林がうっかり手離すと「錯乱」するという。（中略）彼が「Xへの手紙」で「社会のあるがままの錯乱と矛盾とをそのまま受納する事に堪へる個性」と断固言い切る時，それは「社会の錯乱」というより，「泰子の錯乱」を思い浮べているのである。

「強い個性」の観念と小林の恋愛沙汰との深い関連を指摘したものだが，小林が長谷川泰子と別れた時，妹の高見沢潤子に宛てて書いた手紙の言葉――「僕は殆んど人間には考へられない虐待を受けた，そして人間には考へられない忍耐をして来た」――から考えても，小林は自分が泰子の錯乱（虐待）をそのまま受納する事に堪えて来たのだと主張したげである。それは泰子を捨てて家出した自分自身の正当化でもあり，その正当化の根拠とも言える「忍耐」が「強い個性」の一つの要をなしていることは注目していいことであろう。

本稿では以上のような輪郭をもつ「強い個性」の「孤独」性について，小林が「これが本当の意味の孤独なのである」と言う，その「孤独」の意味について考えてみたい。

「孤独」という語が，「孤」と「独」という相似した意味の二字を結合して出来た熟語であることは論を俟たないが，「孤」と「独」の両字に，微妙な，というより重大な意味の違いがあることも，「孤立感」「独立心」などの熟語を思い浮べてみると十分了解できることである。「孤独感」と言う場合と「孤独に徹する」と言う場合とで，微妙にニュアンスの違いが生じる

のも，「孤」と「独」のいずれに重点を置くかの問題であろう。恐らく字源を尋ねてみても同様な違いが明らかになると考えられる。そこで「孤立」と「独立」の区別であるが，これを自己認識の違いとして図式化するなら，「孤立」というのはその根底に，自己の社会あるいは共同体からの疎外感覚を潜ませたものであって，その社会や共同体に対する意識の持ちようによって，あるいは「孤高」となったり，「孤憤」を帯びたり，あるいは「孤立無援」「孤愁」であったりするわけである。例えば小林は「罪と罰Ⅰ」で，ラスコオリニコフの孤独を「孤高者の孤独ではない。彼は自分の孤独をどういう意味ででも観念的に限定してはゐない」と言う。確かに小林の描くラスコオリニコフには，己れ一人気高しとする孤高者の超然たる趣きはない。彼には「地下室の手記」の「俺だけが一人だ。他の奴等はみんな一緒だ」という「孤憤」を帯びた叫びが影を落としており（彼が囚人たちの敵意を買うのもそのためだ），ただ一人で「現実が傍若無人に横行するのにただ堪へ忍ぶ」のである。小林はラスコオリニコフを，「中途半端な否定家や賢人ども」を尻目に，専ら「孤立無援」の戦いを挑む存在として描くのである。

他方「独立」は，自己も他者も，あらゆる存在が，別個の固有な宇宙であるという意識の表現であり，「一体性」の回復を希求する「孤立」とちがい，別個の存在が互いに係わり合いを求めるという，いわば独立の関係としての「連帯」の可能性を含むものと言えるのである。先述した拙稿において私は，ドストエフスキイが「罪と罰」の終章部で開示した「愛の啓示」に対して，小林がついに無縁であったことを強調したが，その「かつては彼の敵であった囚人たちが一人残らず，もはやいままでとは違った眼で自分を見ている」というラスコオリニコフの変貌こそ，「孤立」から「独立」へ，さらには「連帯」への転回を示すものなのである。

小林が言語問題について極めて自覚的である事実は，昭和4年のデビュー作「様々なる意匠」の冒頭を見ただけで明らかである。そしてその事実が即ち小林とフランス文学——とくにサンボリズムの文学との深い関係を予想させるのである。次のような一節がある。

> 1849年，エドガア・ポオの死と共に，その無類の冒険，詩歌からあらゆる夾雑物を取り去り，その本質を決定的に孤立させようとした意図は，ボオドレエルによって継承され，マラルメの秘教に至ってその頂点に達した。人はこの文学運動を「象徴主義（サンボリズム）」と呼んだのである。然し，この運動は，絶望的に精密な理知達によって戦はれた最も知的な，言はば言語上の唯物主義の運動である。(「様々なる意匠」第4節より)

小林は昭和11年の「現代詩について」でも同じ趣旨を繰りかえしており，しかも「僕が嘗て貧しい語学をもって，フランスの象徴派詩人に傾倒出来たのも，彼等の詩に批評精神と抒情精神との本質的なアナロジイを発見したからだ」と告白しているのである。ところでサルトルに「嘔吐」という小説がある。彼は勿論サンボリストとは言えないが，平井啓之の「ランボオからサルトルへ」によれば，「嘔吐」は，プルースト的生体験というものに対決しようとしたのだという。そしてプルーストの生体験は，マラルメ的な音楽的な純粋持続に通じるものだというのである。小林はサルトルに好意を示さないが，「嘔吐」という小説の主題である「存在体

験」「存在啓示」には，言語の問題が深く絡んでいると考えられるのである。

本稿では「嘔吐」という小説をたえず対置しながら，まず「強い個性」というものの「孤立性」を明らかにし，つづいて，小林の古典論（「当麻」から「モオツアルト」まで）の本質に触れ，最後に江藤淳の評伝「小林秀雄」について，それを「孤立」という視点からよみこんでみようと思う。

第　一　章

「Xへの手紙」の「強い個性」の認識論的構造について述べた，「彼の眼と現実の間には，何ら理論的媒介物はない」に関して，例えば「理論」のような「媒介物」，所謂「コード」を拒絶し……と書いたが，その「理論」の代りに「言語」を置けば，それは直ちにサルトルの小説「嘔吐」（1938年発表）において記述された「存在体験」に通じるものとなる。

「嘔吐」は，鈴木道彦「サルトルの文学」によれば，「存在が，主人公（且つ語り手）であるロカンタンをいかにとらえ，それがどのように吐き気として把握されてゆくかがこの小説の主題である」というものであり，ドラマは海辺で子供たちを真似て水切りをしようと拾い上げた石ころに嫌悪を感じて取り落とすことにはじまり，しばしば吐き気（自分の肉体に対するものも含む）に襲われるようになる。頂点は公園のマロニエの樹の根っこに最も激しい吐き気を感じると同時にこれまで起こったことのすべてを理解するというものである。そのマロニエの根っこに対する体験と理解（啓示）は次のように記述されている。

言葉は消えうせ，言葉とともに事物の意味もその使用法も，また事物の上に人間が記した弱い符号もみな消え去った。いくらか背を丸め，頭を低く垂れ，たったひとりで私は，その黒い節くれだった，生地そのままの塊りと向かいあって動かなかった。その塊りは私に恐怖を与えた。（中央公論社「世界の文学」白井浩司訳）

存在がふいにヴェールをはがれたのである。（中略）怪物じみた柔らかい無秩序の塊りが――恐ろしい淫猥な裸形の塊りだけが残った。（同上）

小林の恋愛沙汰が，彼の家出によって終止符をうたれ，彼は奈良に赴くが，その小林を，「目が覚める」と彼自ら呼んでいる経験の強いのがおそったという話が，昭和16年の「感想」に出ている。それは奈良の博物館で，有名な百済観音を眺めていた時生じたものである。

凡てが消えて，往時の健全な意味を悉く剝奪され，ガラス箱の中に抽象化された歴史の残骸の，グロテスクといふより他形容の仕様のない木偶の群れに僕は囲まれてゐた。

ここに記述された小林の体験とロカンタンのそれとの同質性は一瞥して明らかだろう。仏像とマロニエの根の違いはあるが（ロカンタンは，あの海辺での石ころ体験以前に，帰国のきっかけとなった，インドの仏像体験を持っている！），言語的媒介物の消失，裸形の「現実」・「存在」の露出という共通性は疑うべくもない。しかもこの「目が覚める」の記述が，「感想」

の中で，下掲の福沢諭吉の「眼力」(＝強い個性) を論じた部分の序詞となっているという事実は，「目が覚める」が「強い個性」の本質であることを物語るものと言えるであろう。

彼は，観念上の原理を信じなかった。併し，さういふものの力を知らぬ実際家でも，常識家でもなかった。ただ明治初年といふ大過渡期に，さういふものに頼るのが甚だ危険な空想である事をよく知ってゐたのである。彼は，はっきり目覚めて，はっきる見る事の出来る現にあるものを信ずれば足れりとした。(引用はいずれも「感想」より)

「観念上の原理」とは「理論的媒介物」，「現にあるもの」とは「現実」の謂である。ところでロカンタンを襲った啓示は次のような展開を示し，深まりを見せるのである。

私たちは一人として，いささかも，そこにそうしていることの理由を持たなかった。それぞれ存在するものは，当惑し，なんとなく不安で，互いに他のものとの関係においてよけいなものである，ということを感じていた。(「嘔吐」より)

これらよけいな存在の少くとも一つを消滅させるために，自分が自殺するということを漠然と思い描いてみた。しかし私の死さえもよけいなものだったろう。(中略) 私は永久によけいな存在だった。(同上)

ここからロカンタンは，サルトルの有名な「アプシュルディテ (むだごと)」という想念に行き着くわけだが，私が注目したいのは，ロカンタンの「永久によけいな存在だ」とする自己認識である。彼が直面し理解を強いられている事態は，私にも覚えがあるが，悪夢に似た，強烈な世界の変貌の体験である。いままで知り尽くし，馴れ親しんでいたはずの世界が突如消失し，これまで見たことのない，無気味でとりつく島のない，私を冷たく突きはなして屹立する世界が現出する。私は，自分が世界から「孤立」しており，そればかりか，「よけいな存在」であるという意識をどうすることもできないのだ。人間は安らぎに充ちた胎内を出て以来，この種の「孤立」意識を繰り返し味わうことを余儀なくさせられるものである。問題は，その時「孤立」でなくて「独立」の方向に自覚できるかどうかである。「孤立」意識に囚われたロカンタンにとっては，勿論，かつての世界——そこにおいては私の存在理由が約束される——への復帰は不可能であり，すべての試みは「むだごと」とならざるを得ない。ロカンタンは好きな「some of these days」のメロディが生む「小さな苦しみ」の力——彼を含む「全存在」を「恥じ入らせる」力——なるものにヒントを得て，「その物語は鋼鉄のように美しく硬く，人びとをして，彼らの存在について，恥じ入らせるべきもの」を創造しようとする。要するにロカンタン (サルトル) は「淫猥な裸形の塊り」としての「存在」の真直中に投げ出され，「孤立無援」の戦いを強いられ，「孤憤」を発して「裸形の塊り」に対し挑戦するのである。がそれが，自分の「よけいな存在」という在り方を変えるものでないことは，何よりも「私は永久によけいな存在だ」とする自己自身が一番よく知っているはずである。

小林の「強い個性」が，ロカンタンの存在体験に通じるものである以上，当然このような「よけいな存在」といった認識を孕むことになる。小林の言う「本当の意味の孤独」は「独

立」ではなくて「孤立」の意味となるはずである。「Xへの手紙」の序章と終章に出て来る次のような文章をよめば，おのずと納得がいくであろう。

幾度見直しても影の薄れた自分の顔が，やっと見えだしたと思った途端，こいつが宿命的にあんまりいゝ出来ではない事を併せて見定めた。御蔭で（中略）今の俺は所謂余計者の言葉を確実に所有した。君は解るか，余計者もこの世に断じて生きねばならぬ。（序章）

たとへ社会が俺といふ人間を少しも必要としなくても，俺の精神はやっぱり様々な苦痛が訪れる場所だ，まさしく外部から訪れる場所だ。俺は今この場所を支へてゐるより外，どんな態度もとる事が出来ない。（終章）

「Xへの手紙」は即ち「余計者の言葉」であり，小林が「孤立者」の自覚に立って書いた文章なのである。「余計者もこの世に断じて生きねばならぬ」も，「たとへ社会が俺といふ人間を少しも必要としなくても……」も結局同じ決意の表現であり，「強い個性」とは，「ただ明瞭なものは苦痛だけだ」というような「余計者」に徹して生きることなのである。

「Xへの手紙」の前に小林は「おふえりや遺文」（昭和6年11月）という小説を書いている。シェイクスピアの「ハムレット」に依拠して発想されていて，死を決意したおふえりやがハムレットに綴った手紙の形式をとっている。おふえりやは「この世は空しいといふ事も，今こそやっとわかりました」と前置きして，次のように書く。

何んといふお芝居でせう。何んと沢山な役者がこんがらがっていて，みんな何んといふ顔だらう。人間なぞは一人もゐない。ええ，妾は逃げます。妾に役は振られてはゐません。二度と帰らうとは思ひません。幽霊ばかりが動いてゐる。何んの心残りがあるものか。

「妾に役は振られてはゐません」と訴えるおふえりやもまた「余計者」である。が彼女は「Xへの手紙」の俺のように，「この世に断じて生きねばならぬ」と確信することができないのである。「手紙」の俺も「この場所を支へてゐる」（先掲文の中の言葉）ことに疲れ果て，「人々の心がなんにも支へる必要のない溜り」（「Xへの手紙」の言葉）へ出かけて行く。恐らく「罪と罰」のマルメラアドフやラスコオリニコフの溜り場である安酒場のようなところであろう。

突然俺は前でコップを手にしてゐる男が亡霊に過ぎない事を見る。（中略）耳もとで誰かがささやく。――何故お前はもっと遠い処に連れて行って貰はないのか。

おふえりやと同じように，「亡霊」を見，死の誘惑にさらされるのである。だが，俺の場合―囁きはやがて俺を通過して了ふ。そして俺は単に落ち着いてゐるのである。俺は今すべての物事に対して微笑してゐるのである。（引用はいずれも「Xへの手紙」より）

おふえりやにはついに訪れることのなかった転心が，「Xへの手紙」の俺に生じた（泰子との恋愛沙汰・訣別の中で生じた小林の場合の反映であろう）のである。その転心とは「孤立」に徹して生きるということ，「余計者の言葉」を語らねばならぬという決意の誕生を意味すると考えていいであろう。

ところで私は，ロカンタンにおける「孤憤」を帯びた「存在」への挑戦の企てに言及した。小林の場合それは，序章で述べた地下室の男やラスコオリニコフらが試みる挑戦，反逆に当たると考えていいが，「Xへの手紙」にはそれだけでなくて，序章で触れた「一体性」の回復を希求する「孤立」的心理というものを見出すことができる。有名な「母親の理解」に言及した次のような一節がそれである。

> 悧巧さうな顔をしたすべての意見が俺の気に入らない。誤解にしろ正解にしろ同じやうに俺を苛立てる。同じやうに無意味だからだ。例へば俺の母親の理解に一と足だって近よる事は出来ない。母親は俺の言動の全くの不可解にもかかはらず，俺といふ男はああいふ奴だといふ眼を一瞬も失った事はない。

北川透「詩神と宿命」は，「悧巧さうな顔をしたすべての意見」を「おのれの認識や恣意に従って，勝手に許したり，拒絶したりする他者の眼」とし，「母親の理解」を「何もかも許容する，あるいは許容しようと努力する眼」として，小林が「おのれの内部のテスト氏の甘ちゃん振り」を自覚するためには「他者の眼」を身につけるほかないと断じているが，ここはむしろ，「他人」と「身内」，「そと」と「うち」というような日本的共同体の論理であると解すべきであり，言わば「そと」「世間」という冷たい世界に投げ出され，度を失って，もはや復すべくもない「うち」「母」といった一体的世界を希求する孤立的心理を読むべきであろう。私見によれば「他者の眼」を身につけるというのは，「孤立」でなくて「独立」の自覚を持つことであり，その時はじめて，「他人」は「他者」として自己の前に立ち現れるはずである。

第　二　章

ロカンタンと並んで，「嘔吐」の女主人公となるアニーは，以前は，愛とか死といった「特権的状況」が出現した時，それを材料にして「完璧な瞬間」を生み出すことに夢中になる，風変わりな女であったが，今やその企ては挫折し，金持ちの男にすがって，ぶざまに生きている。鈴木道彦は「サルトルの文学」で，そのアニーについて次のように書いている。

> 彼女は他人を否定する役者であり，自ら演技すると同時に自分の演技の観客であろうとする役者なのだ。これは，見られる存在であるとともに，外部から見る存在でもあろうとする空しい試みであり，当然この企ては挫折しなければならないものだ。

つまりナルシスの挫折物語というわけであるが，小林はつとにその「『悪の華』一面」(昭和2年)において，ボオドレエルに論及して次のように書いているのである。

> 由来この「自らを処刑する者」は人生の劇に於いて単なる俳優となる事を肯じない。そこで俳優となり同時に観客となる処の衰弱の一形式をとる。

ボオドレエルの「自意識の化学」なるものの構造を明示した部分であるが，アニーに似た，ナルシスの「衰弱（挫折)」を衝いているのである。ところで，挫折したアニーは，再会した

ロカンタンに向って，次のように語る。

あたしは過去に生きている。あたしの身に起こったことをすべて思い出し，それを整理するの。遠くからだとそれは悪くないわ。それにほとんど魅惑されると言ってもいいわ。あたしたちの昔のこともかなり美しい物語だわ。ちょっと拇指で押すと，完璧な瞬間の続きができ上がるわ。そこであたしは目を閉じて，その中でまだあたしが生きているというふうに想像してみるの。（「嘔吐」白井浩司訳）

アニーはこの会話の少し前のところで，はじめてロカンタンに抱擁を許した時のことを語っているが，その時彼女はいらくさの上に坐っていて，ももを刺されていたという。だが，「あなたに許そうとしていたあのことのほうが，もっとずっと重要だった。あれは一つの契約，一つの約束だった」ので，「腿のことを考えることは許されなかったのよ。痛さを外にあらわさないというだけでは不十分で，痛がってはいけなかった」というのである。「完璧な瞬間」を生きるとは要するに現在を劇的に（演技者と同時に観客として）生きることなのであるが，アニーのこの企ては挫折に終り，結局ロカンタンと同様に吐き気に襲われ，「存在」の啓示――あの「よけいな存在」・「アプシュルディテ」――を共有することになる。そして「完璧な瞬間の続き」をつくり上げ，「過去に生きている」女に変貌するのである。

第一章で私は，サルトルの「嘔吐」の主人公ロカンタンとのアナロジィで，「Xへの手紙」の「強い個性」というものの構造（機能）――言語的媒介物の消失など――や，その性格――「孤立性」「よけいなもの」――を見てきたが，ここでは，主として女主人公アニーとのアナロジィで，小林の古典論を眺めてみたい。

小林の古典論と呼ばれるものは，昭和17年４月の「当麻」に始まるわけだが，「梅若の能楽堂で，万三郎の当麻を見た」という一文を冒頭文とするこのエッセイをよむと，次のような部分が目を惹くのである。

中将姫のあでやかな姿が，舞台を縦横に動き出す。それは，歴史の泥中から咲き出でた花の様に見えた。人間の生死に関する思想が，これほど単純な純粋な形を取り得るとは。

「感想」の中のあの「歴史の残骸の，グロテスクといふより他形容の仕様のない木偶の群れ」という言葉が，「歴史の泥中」という言葉に触発されておのずと浮かぶ。そして「咲き出でた花の様に見えた」という言葉の上に，あの「目が覚める」とはおよそ対蹠的な形の，感受性の運動が鮮やかに浮彫りにされてくるのである。小林はこの時疑いもなく一方で「歴史の泥中」を見つめながら，身を「古典」「過去」の世界に委ねようとしていると言えるのである。

昭和17年５月の「ガリア戦記」では小林は，この有名な戦記に「文学といふよりは古代の美術品の様に迫」られ，次のように書きつけている。

この戦争の達人にとって戦争といふものはある巨大な創作であった。（中略）「ガリア戦記」といふ創作余談が，詩の様に僕を動かすのに不思議はない。サンダルの音が聞える，時間が飛び去る。

この「サンダルの音が聞える，時間が飛び去る」時，小林はまさしく「過去に生きている」と言える。アニーのどこかうつろな調子とは違い，確信をもって生きているのである。それはロカンタンのあの「存在に恥じ入らせるべきもの」といった，挑戦的な調子さえ感じさせる。

昭和17年6月の「無常といふ事」は，「一言芳談抄」のある文章が「当時の絵巻物の残缺でも見る様に浮」んだ経験の記述で始まる。その記述の中に，

僕は，ただある充ち足りた時間があった事を思ひ出してゐるだけだ。自分が生きてゐる証拠だけが充満し，その一つ一つがはっきりとわかってゐる様な時間が。

という言葉があり，アニーの「その中で，まだあたしが生きているというふうに想像してみる」という言葉と響合するのを認めることができるであろう。

昭和17年7月の「平家物語」，同年8月の「徒然草」，同年11・12月の「西行」，昭和18年「実朝」など，露出する時代の暗い現実——例えば昭和16年3月の「歩け，歩け」で小林は「こんなヘンテコな歌が，生れでてくる現代日本のヘンテコな文明の得体の知れぬ病気状態が僕にはもうかなはぬ」と書いている——を吹き飛ばすかのように，次々に文章や和歌や人間群像やが鮮烈に浮かび上がり，小林にフィクショナルな生の高揚を与えるのである。「過去に生きる」ことを可能にするのである。この時の小林は「社会のあるがままの錯乱と矛盾とをそのまま受納する事に堪へる個性」ではない。「感想」の「はっきり目覚めて，はっきり見る事の出来る現にあるものを信ずれば足れりとした」福沢諭吉のようなリアリストではない。少くともそのような「個性」やリアリストに終始する人間ではない。「存在」・「現実」の直中に投げ出されながら，それに「恥じ入らせるべ」く，「過去に生きる」ことを選びとった人間の姿がそこにうかがわれるのである。しかしそれが結局「孤立した文章」であることは，中島健蔵の当時の感想（江藤「小林秀雄」第二部第八章参照）に徴してみても疑う余地はない。

「母上の霊に捧ぐ」と銘打たれた，昭和21年12月の「モオツァルト」が，次のような有名な物語を内包していることは周知のことである。

もう二十年も昔の事を，どういふ風に思ひ出したらよいかわからないのであるが，僕の乱脈な放浪時代の或る冬の夜，大阪の道頓堀をうろついてゐた時，突然，このト短調シンフォニイの有名なテエマが頭の中で鳴ったのである。(第2節より)

この放浪時代に頭の中で鳴った「ト短調シンフォニイ」というのは，「当麻」の舞台を縦横に動き出した「中将姫のあでやかな姿」と等価であり，「歴史の泥中から咲き出でた花」なのである。小林はその「花」に，モオツァルトの「孤独」や「tristesse」を見る。

モオツァルトの孤独は，彼の深い無邪気さが，その上に坐るある充実した確かな物であった。彼は両親の留守に遊んでゐる子供の様に孤独であった。(第9節より)

僕等の心は，はやこの運動に捕へられ，何処へとも知らず，空とか海とか何んの手懸りもない所を横切って攫はれて行く。僕等は，もはや自分等の魂の他何一つ持ってはゐない。あのtristesse」が現れる。——(第10節より)

ここに思い描かれているのは「孤愁」である。一種透明な「孤愁」とも言うべきものである。「Xへの手紙」の「何故お前はもっと遠い処に連れて行って貰はないのか」という「囁き」に誘われて，何処へとも知らず駆け去っていく無垢な魂の色調としての「孤愁」について述べられているのである。

江藤淳は「小林秀雄」の第二部八章の終りで次のように書いている。

「モオツァルト」や「無常といふ事」の音楽のかげに，あの「感想」にあらわれているようなグロテスクな実在の感触をつねにたしかめ直している日常があったということは，重要なことだ。このことを知らなければ，詩と詩への不信があやうい平衡を保っている当時の彼の文体の緊張は理解しがたいからである。

江藤は，小林における「目が覚める」（＝強い個性）という存在体験と，一連の古典論を貫く想像力との関係を，「詩と詩への不信」といった背理の関係と考えている。同じ八章の始めの「美学や言葉に対する不信が極点に達したとき，もっとも美しい言葉が生れるという，小林自身のパラドックス」というのも同じ理解を示したものと言えるが，江藤のこの認識には曖昧な点があって，両者のいわば相補性（盾の表裏）という事実を明示していないのである。両者は「パラドックス」を演じながらも，俗に所謂「同じ穴の貉」であって，「孤立」の圏内での主導権争いをしているにすぎないからである。そしてその争いにおいて勝利を占めるのが，麗しき「詩」の側であることも，ほぼ既定の事実と考えていいであろう。

第　三　章

江藤淳の評伝「小林秀雄」の冒頭に出ている小林の批評の位置づけは，評伝全体の要をなすものである。江藤によれば「それは，夏目漱石から志賀直哉に屈折していった日本の近代小説が，ふたたび屈折して小林秀雄において「批評」を生むにいたる」というもので，これを端的に「彼の批評は，絶対者に魅せられたものが，その不可能を識りつつ自覚的に自己を絶対化しようとする」と書き記している。江藤が小林を志賀との関係で論及するのは当然で，冒頭から小林の初期小説における志賀の影響という問題に取り組むことになる。

さてその影響というのは，河上徹太郎などの言う「志賀直哉的な嫌人性」のことで，江藤はそれを，「一つの脳髄」の「皆醜い奇妙な置物の様に黙って船の振動でガタガタ慄へて居る」という船客の描写に見出しているが，ここで江藤が注目するのは，志賀との差異性であり，「ここには志賀直哉なら決して書かぬような一節がある」という点である。

それは，小林が，石炭酸の匂いや，「醜い奇妙な置物の様」な周囲の現実に嫌悪を覚えながらも，「自分の身体も勿論，彼らと同じリズムで慄へなければならない」と書いていることで，これはきわめて批評的であると同時に，小説的な認識といわねばならない。

この志賀との差異性を江藤は「相対的な感覚」と呼び，「小林は，いわば志賀直哉と夏目漱

石の中間の位置にいて，焦躁にかられながらシニカルな視線を現実に投ずるのである」と書いている。小林は「志賀直哉的な嫌人性」を貫き，絶対者の「孤独」を生きることを願いながら，「自分の身体」に対して感じる嫌悪をどうすることもできず，ただ苛立つばかりというのである。この時小林を襲うのは，志賀直哉的な世界とは別個の，そしてそれと等価な世界たり得る自己の発見というような「独立」の自覚ではない。深く魅惑され，一体化を強く希求する当の志賀直哉たり得ないという，「不可能」の自覚である。「一つの脳髄」の先掲文（江藤が引用している）につづく「自分だけ慄へない方法は如何にしても発見出来ない」という文章がそれを示している。

江藤は「一つの脳髄」のガタガタ振動する船を「現実」の象徴として把え，以後の小林の企てを「彼らと同じリズムで慄へなければならない」「現実」への復讐であるとし，その復讐の実現を小林の古典論，とりわけ「モオツァルト」に見出すのであるが，「一つの脳髄」の結末については「これと逆の方向を示しているように見える」と述べ，次のように書いている。

ここでは彼はあきらかにひとりの小説家として，あの嫌悪すべき客観的な現実をうけいれざるを得ない者として書いている。

江藤が「客観的な現実」と呼んでいるのは，「砂地に一列に続いた下駄の跡が目に映った。思ひもよらぬものを見せられた感じに私はドキリとした。私はあわててそれを脳髄についた下駄の跡を一つ一つ符号させ様と苛立った」というものであり，「言語的媒介物」喪失に苛立っている点で，「嘔吐」の「存在」や「感想」の「歴史の残骸」に相当すると見るべきであり，結局「孤立」的な「強い個性」(「目が覚める」) を予告するものなのである。したがって「これと逆の方向」というより，前述した「盾の裏面」と考えるべきである。そして「客観的な現実をうけいれ」られるのは，「孤立」においてでなく，「独立」の自覚においてなのである。

さて小林における志賀直哉の問題性は，友人の富永太郎との交遊を通してみても確認されるのである。小林が父を亡くし，病母を抱え，家の物質的不如意に苦しみ，己れの神経衰弱にも責められながらも，泣き面を見せぬ青年だったのに対し，富永は人妻に失恋し，同情した父の用立てた旅費で，上海に遊んでくるような境遇だった，と江藤は言う。そして二人が示す，志賀文学——志賀直哉と言ってもいい——に対する態度の違いを，次のように分析している。

「有難い本だ」という一句に，大正期の青年がそうであったと推測されるような，宗教的な志向を感じとることもできるだろう。一方，小林は自力で自分を救済しなければならない。彼の態度はいわばジャンセニスト風であって，問題は果して自分が志賀直哉になれるかというかたちでのみ提出されているのである。

「有難い本」というのは「暗夜行路」のことである。言うまでもなくこの一節は，あの「絶対者に魅せられたものが，その不可能を識りつつ自覚的に自己を絶対化しようとする」というテーゼのヴァリエイションであって，二人の境遇の違いがそのまま志賀に対する態度の相違となって現れている事実を示すと同時に，「彼の態度」が「大正期の青年」のそれとちがい，志

賀直哉のように自ら神たらんとする挑戦的なものである事実を明示しているのである。

ところで上記引用の直前に，同じ趣旨を説いた次のような文章もある。

「子」はもちろん「無垢」「純粋」「自然」などを代表するが，反抗すべき父をもつ富永ほどには，小林は「純粋」でも「無垢」でもありえない。（中略）しかし小林もやはり自らの言葉を持たなければならないのである。「子」ではありえない自分を，いかに「子」として存在せしめたらよいか。

この文章は，大岡昇平が「富永太郎の手紙」で志賀文学の時代的意義について述べた一節を敷衍したものだが，江藤によれば小林の歩みは上記課題の解決の試みの歴史であり，小林がこれらの課題を解決して「志賀直哉になれ」，かつ「『子』として存在せしめ」ることを成就するのは，一連の古典論，とくに「モオツァルト」においてなのである。そしてそれが同時に嫌悪すべき「現実」への復讐の実現を意味することは前に言及した通りである。評伝「小林秀雄」の結語に次のような言葉が現れるゆえんである。

小林秀雄が，モオツァルトという「無垢」――「純粋」の「仮面」に自己を一致させ切ったとき，彼の肉体は消え，逆に「モオツァルト」は彼の魂をひたした青い海と空のようなものとなった。（中略）自己の宿命を追いながら，まさにそのことによって時代と戦うこと，これが彼の独創であった。そして，彼は戦いながらもっと遠くまで行った。彼はついには「歴史」すらも超えてしまったのである。

「歴史」というのは「現実」の同義語である。「彼の肉体」――「一つの脳髄」では「自分の身体」となっていた――も嫌悪すべき「現実」である以上，復讐の実現はその消滅を意味するだろう。モオツァルト＝小林は，「彼の肉体」を超え，「歴史」をも超えて，「魂」そのものと化し，あの「空とか海とか何手懸りもない所を横切って攫はれて行く」（「モオツァルト」第10節より）というわけである。そしてその「魂」そのものが，「無垢」「純粋」の代名詞である「子」を意味するのである。小林はかくて「不可能」を「可能」にするのである。

これが江藤の評伝「小林秀雄」の骨子である。この最初の長大な評伝が即ち「モオツァルト」論としてよめるのも了解できるというものである。引用中の「宿命」――「宿命の理論」や「仮面」――「仮面の論理」などは，「いかに『子』として存在せしめたらよいか」という課題，というより内的衝迫に駆られて小林が生み出したものと考えられており，その背景もしくは母胎となるのが，長谷川泰子との恋愛沙汰であり，日中太平洋戦争というわけである。

この評伝が「一つの脳髄」の分析に始まり，「モオツァルト」の讃美に終っている事実から考えても明らかだが，既に瞥見したように江藤は，「一つの脳髄」の結末の示す動向を，小林にとって本来的でないとする遠近法をとっているのである。彼は嫌悪すべき「現実」「歴史」への復讐，その超克が小林にとっての至上命令――それを迫るのは小林の志賀直哉に対する傾倒であり，自己絶対化の意志であるというわけだ――であるとする立場にたち，その「現実」「歴史」を「受納する事に堪へる」という小林のリアリズムを一種の反対給付と考えていくの

である。上記の引用では中略したが,「彼のリゴリズム,彼のデカダンス,彼の実在への苛立ち——つまり,彼が一個の透明な『精神』となるために支払って来たさまざまの代償」という結語の言葉がそれを明示している。これを所謂「主と従の弁証法」というもので理解すれば,「モオツァルト」が主であり,「一つの脳髄」の,脅迫的で忍従を強いられている結末は従となる。第二章に引用した「美学や言葉に対する不信が極点に達したとき,もっとも美しい言葉が生れるという,小林自身のパラドックス」というのはその弁証法の端的な表現であり,「美しい言葉」すなわち「モオツァルト」が「不信」を圧倒して主となるわけである。

小林のライフワークといわれるドストエフスキイ論も,このような遠近法(弁証法)に立脚して分析されることになる。つまりそれがどこまで「美しい言葉」であり得るかという視点から考察がなされるのである。例えば戦前の「白痴」論について次のように言う。

実際この五章からなるエッセイは,そのまま五つの楽章からなる絃楽四重奏のように美しい。(中略)「Xへの手紙」の屈折した自意識の告白においても,「おふえりや遺文」の心象に乏しい抒情においても,ついによくなし得なかったことに小林秀雄はここで成功している。

あるいは「ドストエフスキイの生活」を批判して次のように論じている。

「モオツァルト」は完全に詩的であり,カアの「ドストエフスキイ」は完全に散文的であるのに,「ドストエフスキイの生活」では小林は本来散文的であるべき評伝をあまりに詩的な精神によって書こうとしている。

「美しい言葉」というのは「詩的言語」のことであり,それが「評伝」を失敗に導いたというのである。小林の古典論を論じた部分でも,そのドストエフスキイ論に言及している。

当時の彼にはまだ「死者の確かな形」という思想はなく,ドストエフスキイやムイシュキンは,「仮面」という規矩になり切るためには人間的な対象でありすぎた。

だから「対象を踏みやぶって小林自身の姿が現われ,その結果ドストエフスキイもムイシュキンも,小林の個人的な記憶のなかに尻すぼまりに呑みこまれて行く」というわけである。要するに小林のドストエフスキイ論は「美しい言葉」になり得ていないというのが,江藤の最終裁定なのである。江藤の「小林秀雄」の遠近法(弁証法)は貫かれているわけである。

ところでこの江藤「小林秀雄」の遠近法に異を唱えたのは,秋山駿の「小林秀雄の戦後」(昭和35年)である。秋山は「美しいといえば美しい。だが静かで抽象的な世界である」と述べて「モオツァルト」傑作論に疑問を投げつけ,次のように論じる。

小林は,こういうぎりぎりの難解さであらわれる精神の極度の状態を,ドストエフスキイの「異様な思惟様式」として『「白痴」について』で追求しているが,もうそこには,人間の平凡な能力とは手の切れた精神の秘儀めいた精神は何もあらわれない。

「異様な思惟様式」というのは戦後の「白痴」論(昭和39年)の要をなすものであり,ドストエフスキイが政治犯として逮捕され,銃殺の茶番劇を演じさせられた時生じて以来,彼の精神の本質的な様式となったとされるものであるが,その内実は「理想や真理で自己防衛を行ふ

のは，もう厭だ，自分は，裸で不安で生きて行く」（「白痴」論より）というもので，「強い個性」の真骨頂を示すものなのである。秋山はこのような小林の戦後の営為を評価し，「モオツァルト」のいわば天才主義を斥けるわけである。

秋山のこの小林論が，江藤の遠近法を逆転させたものであることはもはや言を要しないだろう。「美しい言葉」即「モオツァルト」に収束する江藤の小林像に対し，秋山の「強い個性」を生きぬく「白痴」論の小林像がとってかわったと言えるだろう。だがそれはあくまで遠近法の逆転であって，遠近法そのものの批判ではない。しかもそれは先に述べた「主と従の弁証法」を無視した，不自然な遠近法なのである。秋山と江藤のこの対立も「孤立」の圏内での主導権争いに過ぎないと考えられるのである。このいわば「孤立」の遠近法を相対化できるのは，私見によれば「独立」の視点以外にはない。それは「独立」の自覚をもち，「客観的な現実をうけいれる」ことができ，「連帯」の実現をめざす者の視点であり，「美しい言葉」といい，「強い個性」といい，これを「孤立」の言語であり，「孤立」の眼であると見なす立場なのである。一章で私は，人間は安らぎに充ちた胎内を出て以来この種の「孤立」意識をくりかえし味わうと書いたが，「孤立」意識は，人間が乳離れして「独立」するまでに味わわねばならぬ「未熟」の印だと言えるであろう。そしてその意味では，江藤の「小林秀雄」は，自らの遠近法の性格に対して自覚的であると考えられる。次のような文章があるからである。

もし彼が「この思想」によって批評家になったとすれば，彼は「成熟の断念」の上に，「人と人との間の交渉」からの脱出の上に，その原理をうち樹てたのだというべきだろう。

「この思想」とあるのは「Xへの手紙」に出て来る「俺は人を断じて殺したくないし人から断じて殺されたくない」という思想をさす。「成熟の断念」と言えば聞こえはいいが，所詮は「未熟にとどまる」ということであろう。江藤が小林の課題を，「子」ではありえない自分をいかに「子」として存在せしめたらよいかという形で設定したとき，すでに「成熟の断念」「未熟への復帰」は約束済みのことだったと言えるだろう。「子」は確かに「無垢」「純粋」「自然」などの代表であるかも知れないが，それはまた「幼稚」「未熟」の代名詞でもあるからである。

人間は，「幼稚」「未熟」で「独立」できていないとき，「存在」や「現実」に囲繞されて「孤立感」に襲われ，怯えるということが起こる。そしてそれをのがれ，見返すために，安らぎを約束する「一体性」の世界への復帰を試みるものであろう。「嘔吐」のロカンタンやアニーの場合がそれであり，小林における「強い個性」と「美しい言葉」の弁証法もまた例外ではないのである。二章で私は，小林の一連の古典論を「過去に生きる」試みであると断定したが，小林の「過去に生きる」試みはそれにとどまらないので，「近代絵画」も「本居宣長」もすべて「古典」という「過去を生き」たものと言えるのである。そもそも「強い個性」を探ろうとしたドストエフスキイ論にしてからがそうであり，小林自らそれを証明するように，昭和14年の「歴史について」――死んだ愛児の顔が鮮やかに見えてくる母親の技術を中心に書かれ

ている——という一文を,「ドストエフスキイの生活」の序に付したのである。小林はよく「小児の叫び」というものを引き合いに出す。

人々は小児の叫びが大人を動かす所以は,正に小児の現実主義精神によるといふ事実を思へば足りる。(「アシルと亀の子Ⅳ」より)

この「小児の叫び」は序章で触れた「現代詩について」では,詩精神の現実性を示すものとして出て来る。小林はいわば「小児の叫び」でもって「大人を動か」そうとしたのである。

終　　章

一章で私は,「嘔吐」の主人公ロカンタンが,彼をとり囲む「淫猥な裸形の魂」に挑戦し,それに「恥じ入らせるべきもの」としての「物語」を創造しようと決意していたことを述べた。小林の「過去に生きる」試みである一連の古典論にも,その意気ごみはあらわである。例えば,先にも言及した「当麻」の中で,「中将姫のあでやかな姿」に感動した眼をふと場内の観客の顔に移した小林がたちまち毒舌を吐き散らすところがある。「この場内には,ずゐ分顔が集まってゐるが,眼が離せない様な面白い顔が,一つもなささうではないか」で始まり,果てはルソオの「懺悔録」の「女々しい毒念」というものにその責を負わせて毒づくのである。あるいは「無常といふ事」でもいい。「生きてゐる人間とは,人間になりつつある一種の動物かな」という奇想が浮かび,「現代人には,鎌倉時代の何処かのなま女房ほどにも,無常といふ事がわかってゐない」と激しい調子で叱りつける。おそらく自分自身を含む「生きてゐる人間」「現代人」に対して小林は,恥を知れ,と訴えているのであろうが,それを聞かされる側が必ずしもその託宣を受けいれるとは限らない。小林が共感を惜しまない,「罪と罰」のラスコオリニコフに対して,シベリアの流刑囚たちが敵意を隠さないのも,けだしそれなりの理由があるのである。周知のようにラスコオリニコフは,非凡人の理論にとりつかれ,十分自覚的計画的に金貸しの老婆を殺害することによって,非凡なる自己——これを「絶対者」「完璧な自己」と呼んでもいい——を証明しようと試みるが,いうまでもなくその野望は挫折せざるを得ない。彼は,自分自身からも「孤立」し,屈辱と苦痛に苛まれながら,流刑地シベリアに足を踏み入れるわけである。なぜラスコオリニコフは挫折するか,小林自身の言葉を借りて言えば,彼も「自らを処刑する者」であり,「俳優となり同時に観客となる処の衰弱の一形式をとる」からである。この鼻もちならないナルシスの挫折に,屈辱や苦痛にどうして付き合わねばならないのか,その唇をもれる託宣にどうして耳を傾けねばならないのか,おそらくこれがラスコオリニコフに敵意を隠さない囚人たちの心底なのである。

ラスコオリニコフが救済されるのは,彼が「独立」の自覚をもち,自分もソオニヤも囚人たちも,それらすべてが「客観的な現実」として現前するときである。ドストエフスキイが「罪と罰」のエピローグで示した「愛」の啓示というのは,そういうことにちがいない。

この日は，かつては彼の敵であった囚徒たちが一人残らず，もはやいままでとは違った眼で自分を見ているようにさえ，彼には思われた。彼は自分から進んで彼等に話しかけたくらいである。すると彼らも愛想よく答えるのだった。（小沼文彦訳　筑摩書房）

奇蹟というものがあるとすれば，おそらくこんなものである。ある日ある瞬間の目覚めなのである。今までの自分がどこかへ遠ざかり，新鮮で親密な自分がそこに立ち現われるというような経験なのだと思われる。

同じ「目が覚める」ということを説く小林にとって，しかしながら「罪と罰」のこのエピローグの目覚めは無縁である。小林はかたくなにこれを軽視する。彼が思い描くラスコオリニコフの姿は次のようなものである。

ラスコオリニコフは，認識が到るところで難破する事を確かめ，もはや航海の術もなく，自己の誠実さといふ内部の孤島に辿りつく。彼は，この孤島の恐ろしく不安な無規定な純潔さに，一種の残忍性をもって堪へようとした。（「罪と罰Ⅱ」）

この姿に小林は「一切の人間的なものの孤立と不安を語る異様な（これこそ真に異様である）背光」を見るのである。三章で言及した「異様な思惟様式」においてと同様に，「強い個性」の真骨頂を見てとることができるのである。

参　考　文　献

「小林秀雄全集」　新潮社版全12巻
「小林秀雄」　江藤淳　講談社
「詩神と宿命――小林秀雄論――」　北川透　小沢書店
「兄　小林秀雄との対話」　高見沢潤子　講談社

「サルトルの文学」　鈴木道彦　紀伊国屋書店
「ランボオからサルトルへ――フランス象徴主義の問題――」　平井啓之　弘文堂

「罪と罰」　ドストエフスキイ　小沼文彦訳　「世界名作全集19」　筑摩書房
「嘔吐」　サルトル　白井浩司訳　「世界の文学49」　中央公論社

「分裂病の少女の手記」　セシュエー　村上仁・平野恵訳　みすず書房
（熟読書の一つ。「独立」，「客観性」などの概念について多くを学んだ。）

熊本の湧泉（その８　鹿本）

（昭和63年９月１日　受理）

荒　牧　一　利*1
田　中　浩　二*2
古　江　研　也*3

The Springs of Kumamoto

Kazutoshi Aramaki
Koji Tanaka
Kenya Furue

Abstract

We have investigated many springs in Kumamoto Prefecture. In this eighth report. many springs in Yamaga City and Kamoto District were investigated with geographical surroundings, forklores and some histories.

1　はじめに

熊本の湧泉の調査研究の一環として，熊本県北部の鹿本地方の湧泉についての調査研究を行った。調査は文献調査，現地への問い合わせ，1984年11月から1988年７月へかけての現地調査によって行った。現地調査では湧泉の位置や地形の確認，水温測定，水質分析用の採水，写真撮影などとともに，付近の人達から慣習や言い伝え，利用状況などについての聞き取りを行うことに重点をおいた。60カ所以上の湧泉について調査することができた。なお湧泉名などについては，発音のみで字体の分からないものについては平仮名で示し，特に名のついていないものについては土地名などを用いて表示した。

＊1　＊2　＊3　一般科目学科

2．調査地域の概要

山鹿市と鹿本郡内の各町について概要を記しておく。まず，地形的に鳥観すると，北部の福岡県境には星原山（793m），国見山（1018m）の峰が連なり，海抜300m～800mの山々が筑肥山地を形成している。その南方には，海抜20m～80mの菊鹿盆地がある。これらの山岳地帯に水源をもつ岩野川（24km），上内田川（14km）は菊池川（61km）と合流し，中流域には菊池平野に続く肥沃な水田地帯が広がっている。年間降水量が2000～3000ミリの山間部では林業のほか，クリ，ミカン，茶，シイタケなどの生産が盛んである。菊池川流域の丘陸地帯，とりわけ菊池洪積台地に連なる植木地区は，畑作地が大部分を占め，スイカ，メロンなどの施設園芸で有名である。次に地質的に概括してみよう（Fig. 1）。筑肥山地は，古生代の変成岩類とそれに貫入した中生代の花崗岩類，新第三紀～第四紀初期の安山岩類などからなり，東部には阿蘇溶結凝灰岩が分布している。また，菊池川流域は沖積層からなっている。調査地域は1市（山鹿市）5町（鹿北町・菊鹿町・鹿本町・鹿央町・植木町）に及んだ。各々の市町に簡単に触れておく。山鹿市は，人口約3万3千人の菊池川中流域に位置する田園観光都市で，温泉と全国有数の装飾古墳で知られている。主な産業は米，麦，野菜，畜産で，県北部の産業交通の要衝として発展している。湧泉は，河川の丘陵地によく見られた。鹿北町は人口約6千人の山間の町で，総面積の76パーセントが山林である。傾斜地が多いため，クリ，ミカン，茶などの生産が盛んで，特に茶の栽培の歴史は古く，細川藩主の御前茶として用いられた。岩野川上流の岳間渓谷は，清流と景色に恵まれ，訪れる人が増えている。湧泉は山間部の随所に見られた。人口約9千人の菊鹿町は，福岡県と大分県と境を接する町で，清流と緑とに恵まれ自然休養村の国指定を受けている。クリ，シイタケ，タケノコなどの特産品のほかメロンの栽培も盛んになってきた。鞠智城跡などの史跡が多く，上内田川上流の矢谷渓谷は近年観光開発が急速に進められている。湧泉の数も多く，主に山間部に見られた。鹿本町は菊鹿盆地の裾に開けた町で，約9千人が住んでいる。うちわの生産で有名な来民町を中心に発展してきたが，米とメロンと菊をキャッチフレーズに町作りが進められている。湧泉は北部の丘陵地と上内田川の流域に見られた。人口約6千人の鹿央町は国見山（389m）と米野山（312m）の山麓に広がる純農村地帯で，湧泉も自然林が多いそれらの麓に見られた。スイカと養豚の生産で知られる植木町は，人口約2万7千人で熊本市のベッドタウンとして発展している。質量ともに豊かな湧泉に恵まれていて，河川が少ないこの地域の貴重な農業用水となっている。

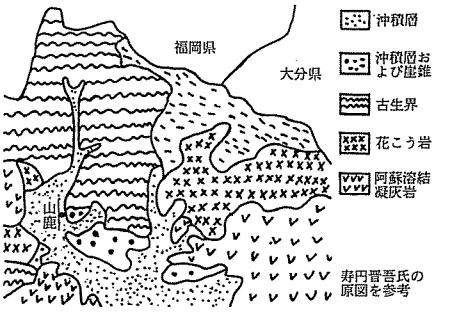
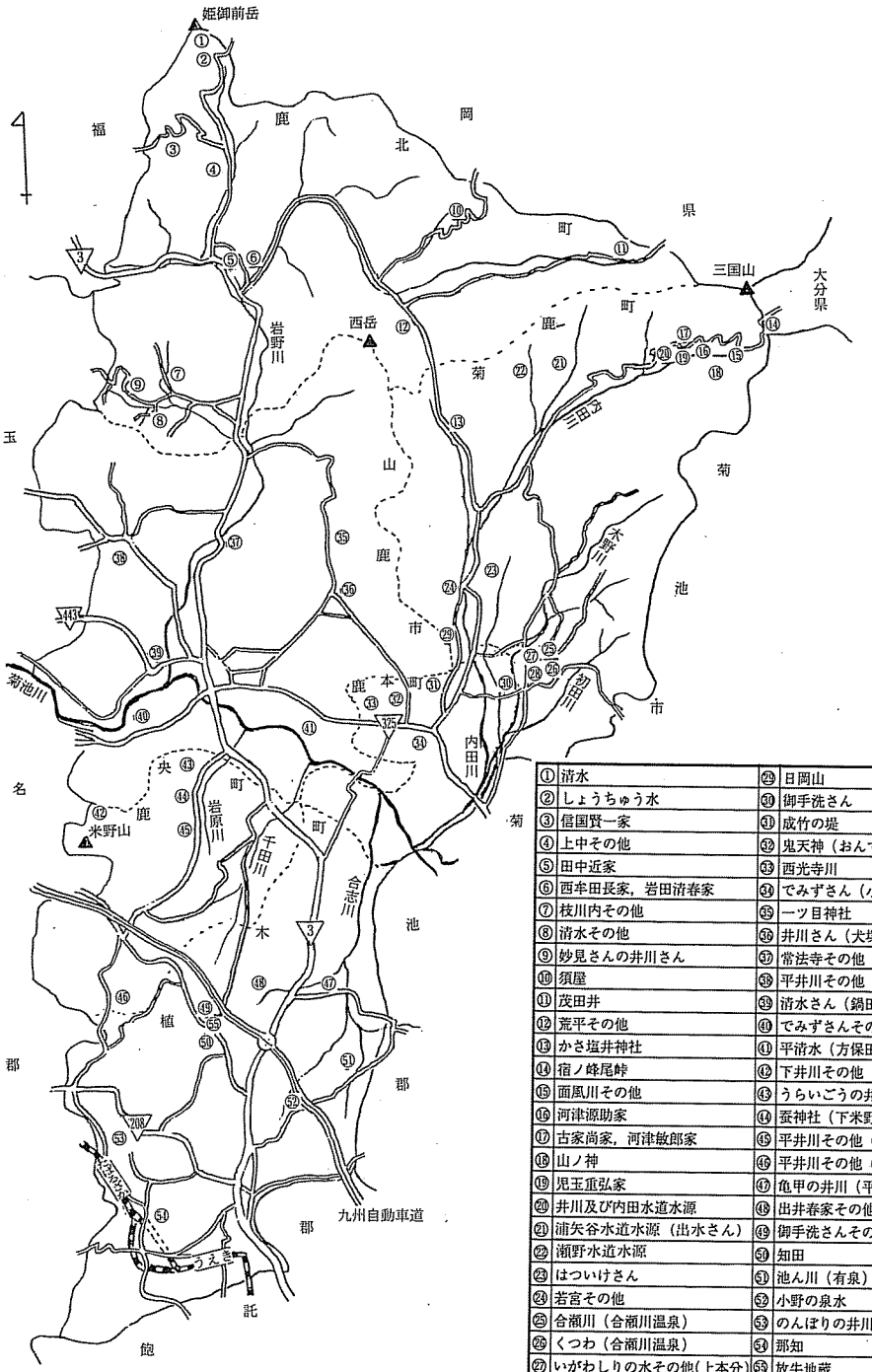


Fig. 1　A geological map of Yamaga City and Kamoto District

3．山鹿市・鹿本郡の湧泉略図



①	清水	㉙	日岡山
②	しょうちゅう水	㉚	御手洗さん
③	信国賢一家	㉛	成竹の堤
④	上中その他	㉜	鬼天神（おんてんじん）
⑤	田中近家	㉝	西光寺川
⑥	西牟田長家，岩田清春家	㉞	でみずさん（小島）
⑦	枝川内その他	㉟	一ツ目神社
⑧	清水その他	㊱	井川さん（犬塚）
⑨	妙見さんの井川さん	㊲	常法寺その他
⑩	須屋	㊳	平井川その他（小群）
⑪	茂田井	㊴	清水さん（鍋田）
⑫	荒平その他	㊵	でみずさんその他（長岩）
⑬	かさ塩井神社	㊶	平清水（方保田）
⑭	宿ノ峰尾峠	㊷	下井川その他（岩倉）
⑮	面風川その他	㊸	うらいごうの井川その他(岩原)
⑯	河津源助家	㊹	蚕神社（下米野）
⑰	古家尚家，河津敏郎家	㊺	平井川その他（下米野）
⑱	山ノ神	㊻	平井川その他（霜野）
⑲	児玉重弘家	㊼	亀甲の井川（平井）
⑳	井川及び内田水道水源	㊽	出井春家その他（今藤）
㉑	浦矢谷水道水源（出水さん）	㊾	御手洗さんその他（清水）
㉒	瀬野水道水源	㊿	知田
㉓	はついけさん	(51)	池ん川（有泉）
㉔	若宮その他	(52)	小野の泉水
㉕	合瀬川（合瀬川温泉）	(53)	のんぼりの井川その他（舟底）
㉖	くつわ（合瀬川温泉）	(54)	那知
㉗	いがわしりの水その他(上本分)	(55)	放牛地蔵
㉘	ごくいがわ（上本分）		

Fig. 2　A rough sketch of springs in Yamaga City and Kamoto District

3－1　清水（しみず）　　鹿本郡鹿北町岩野小字柚木谷

柚木谷（ゆのきだに）は福岡県との県境近くにある。田中続さん（77歳）から話を聞く。「ここは古い村でして，昔はお湯が出ていたことから“ゆのきだに”と呼ばれたと言われています。左手に見えるのが姫御前岳，右手が女岳，男岳は姫御前岳の後になるので，此処からは見えません。江戸時代女岳の山崩れで村は埋まってしまったそうです。今でも３ｍも掘るとその時の岩がゴロゴロ出てきます。そしてお湯も出なくなり，出るよう祈禱までしたそうですがだめだったということです」。「村の由来などの記録は，昔住職さんが整理とすると持って帰られたのですが，寺が火事に遭って焼失，写しが若干残っている程度です。伝承では1050年前，藤原家の子孫が住みついたのが村の始まりといわれ，はっきりしているのは700年前ぐらいからで，田中孫七の名前が出てきます。現在柚木谷は14戸ですが全部が田中姓です。上中の刀落にある墓も田中左衛門丞で，上中も岩野もここから出た人々ですよ」。「生活用水は沢水を利用している。湧水は姫御前岳の中腹にあり，土地の者は“清水”（しみず）と呼んでいます。湧水は水田用です」ということであった（Ｓ62・11・25）。

“清水”には息子の博明さん（38歳）が案内して下さる。途中良成親王の妃が山中で難産された場所に，安産の神様を祀っているという話なのでお願いする（これが姫御前岳という名称の由来でもある，Fig. 3）。車を下り100ｍ程山頂へ向かって登ると細い筋のような道がある。「こんな道ですが地図には２ｍ幅の道として書かれているんですよ。この道は小栗峠から黒木に至る旧街道なんです」と。姫御前に近づくと杉林の中に点々と黒い石が積まれている（Fig. 4）。炭焼の跡かとも思うがわからない。道々博明さんは「姫御前の祭は安産の祭なので，女性ばかりの祭です。祭は11月で，正月には福岡や大分からもお参りに来ます。またこの神様の影響ですか女性が長生きするんです。今も女性は90歳をこえる方が居られますが，男性は77歳の父が２番目の年寄りなんです」と。また「年中行事の多い所でして，これからも30日は山神祭で，この日は屋根のふき替えをします。12月２日も祭です」といった話をして下さる。さらに「こんな小さな部落ですがお墓がこの山中に多い

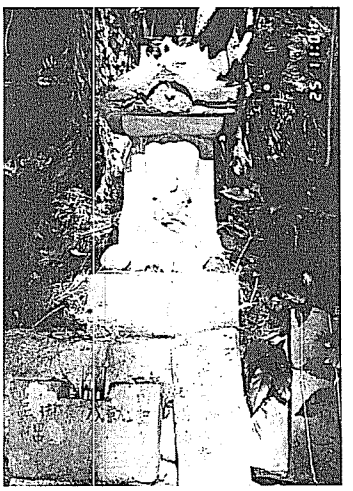


Fig. 3　The Himegozen

Fig. 4　The ruins of a black stone masonry

んです。ほとんどが無縁仏です。それはこの地が修験者の修行場であり，また阿蘇山への峯入りの道でもあったためでしょうと。そう言えば尾谷に伝わる鏡観房の墓（宝篋印塔）は修験にまつわる話の代表であろう。

ところで“清水”（Fig. 6，7）であるが，田中続さんの蜜柑畑の近くの杉林の中にある。そこは山の傾斜がやや凹んだ樫の大木の根ッ子にある。「昔はこんこんと湧いていたのですが，山が杉山となった直後は絶えてしまったんですよ。最近また湧きはじめましたが，涵養林としては自然のままでなければだめですね」。「この水で2.5ヘクタールの水田を養っています」という話であった。湧水口はセメントで囲まれ，澄んだ水が溜まっていて，ここから灌漑用の黒いパイプ（経５㎝）が引かれている。湧水口をこのように整備したのは今年だという。湧水口の前にはセメントの水槽（全然使用されていない）があるが，これは以前利用していたのであろう。現在はこの上に板を渡しモーターが据えられている。これは蜜柑の消毒用のものであろう。山中の気温は13.8℃，水温は15.2℃であった。

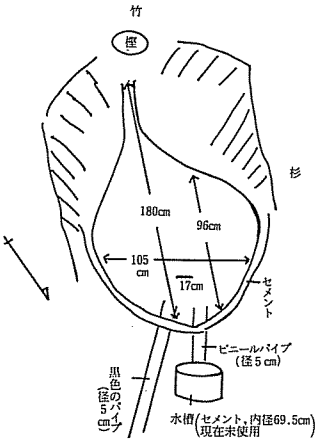


Fig. 5　A rough sketch of the spring of Shimizu

Fig. 6　The spring of Shimizu

Fig. 7　The spring of Shimizu

３－２　しょうちゅう水　　鹿本郡鹿北町岩野小字男岳

県道13号線（黒木鹿北線）沿い，柚木谷の集落に入る手前左側にビニールパイプから水が流れ落ちている。この場所からやや下った男岳山麓の三宅忠義さんに，焼酎水であるかどうか尋ねたところ，その確認は出来たが名称の由来はわからなかった（Ｓ62・10・14)。その由来は後日，田中続さんから聞くことができた（Ｓ62・11・25)。「昔，行商人が原酒を運んできてあそこの水で割り，アルコール度の違った何種類かの酒を作って売った。そこでこの水は焼酎に変わるということから焼酎水（Fig. 8）と呼ばれるようになった」ということである。また

その湧水口は田中博明さんの話では100ｍほど登ったところにあるというので，水の流れをたどって登るが竹藪につき当たりそれ以上登ることが出来ずに引き返した。周辺の様子から岩の間から湧いていると思われる。また博明さんは，最近ダンプが登り水が少し汚れているので飲まない方がよいと注意をうけた。以上のことからここの採水は止めたが，水温は14.1℃であった。

なお焼酎水に至る途中，かつての分校（現在公民館として使用）にもパイプが引かれているが，これは沢水利用であることを上中の有働義子さんから聞いた（Ｓ62・10・14)。

Fig. 8　The spring of Shochusui

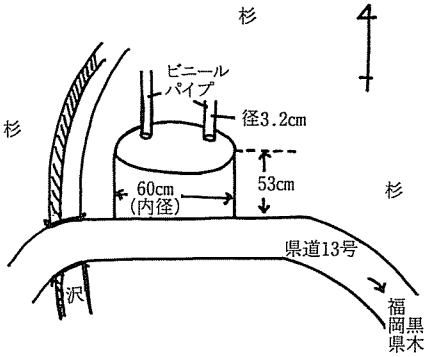


Fig. 9　A rough sketch of the spring of Shochusui

3－3　信国賢一家　　鹿本郡鹿北町岩野小字竹の谷

県道13号線を外れ陣床峠へ向けて車を走らせると竹ノ谷道路公園へ出る。この近くに信国賢一家がある。湧水を利用しているというので尋ねる。賢一さんは仕事で不在，利男さん（76歳）が湧水口（Fig. 10）まで案内して下さる。水量は僅かであるが，一軒の生活用水としては十分であろう。湧水口への途中丸型と四角のタンクが並んでいるが（Fig. 12），一度これに溜めて家に引いているわけである。

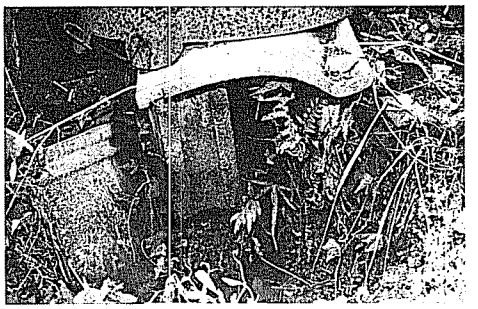


Fig. 10　The spring of Nobukuni's

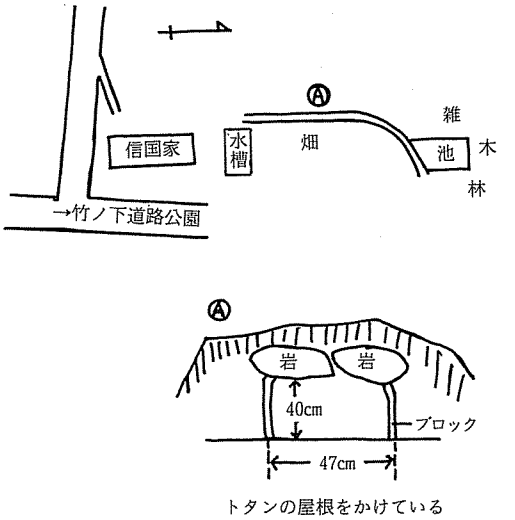


Fig. 11　A rough sketch of the spring of Nobukuni's

なお湧水口から少し離れた雑木林の中に池（Fig. 13)があるが，利男さんの話では昔はこの池にも相当量の水が湧いていたという。また庭に沢水を利用して池を作り鯉を入れていたが，最近はすぐ死んでしまう。何故だろうかという話であったが，筍など山の作物栽培に使用する肥料などの影響ではないかと思われる。それからこのような僅かな水量ではあるが湧水を，この一帯の家は各戸がもっていて利用しているのだという。

なお，竹ノ谷道路公園は，県の「美しいふるさとづくり」の一環に町が委託事業として昭和50年3月に完成されたもので，米寿会が管理に当たっているというが，公園の敷地として1,350 m²の山林を利男さんが寄贈したものである。公園は奇麗に整備されている（S 62・10・14)。

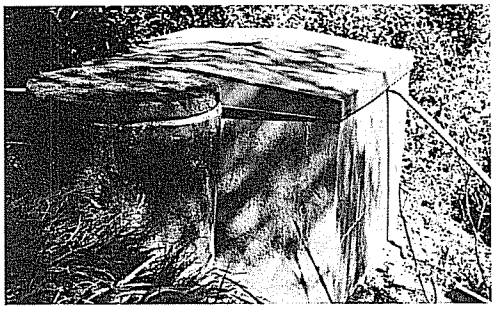


Fig. 12　The water tank at Nobukuni's

Fig. 13　The pond at Nobukuni's

3－4　上中の湧水その他　　鹿本郡鹿北町岩野小字上中

鹿北町役場での話の通り下中は沢水利用であったが，上中に入ると湧水を利用している家がある。その一つが有働久義，主計はつえさんの2軒で利用しているものである（Fig. 15)。湧水は有働久義家の道路反対側，杉林の中に少し入った所左側にある。湧水口は左右2つあって（Fig. 16, 17)，それぞれから引いて水槽を満たし，これから有働，主計両家へ引いているのである。

湧水については有働義子さん（77歳）から聞く。「湧水にまつわる伝承などはありませんが，50年ほど前から利用をしています。年中枯れることはなく家庭用すべてに使っています。美味

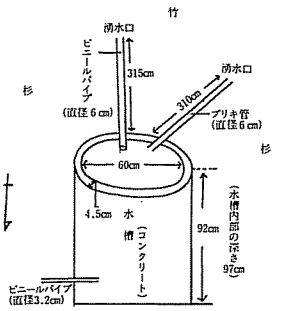


Fig. 14　A rough sketch of the spring of Kaminaka

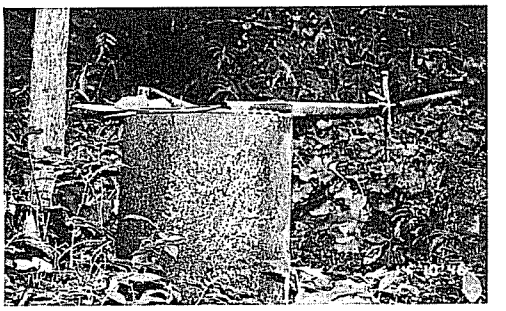


Fig. 15　The spring at Kaminaka

しい水ですよ」ということであった。採水は昭和62年11月25日，気温12.1℃，水温14.6℃。

それから湧水口近くに，コンクリートで囲った大きな水槽があり，ビニールパイプから水が流れ込んでいるが，これは沢水で作業用のものである（Fig. 19)。

また有働忠持家の道路反対側に，道路沿いに一寸した池が作られている（Fig. 20)。水は上の杉林からビニールパイプで引かれているので，杉林に入ってみるとすぐに水槽(Fig. 21）がある。ただしこれは沢水を利用しているものであった。それから刀落にもあると聞いたが，時間の都合で行けなかった(S 62・10・14, 11・25)。

Fig. 16　The spring at Kaminaka

Fig. 17　The spring at Kaminaka

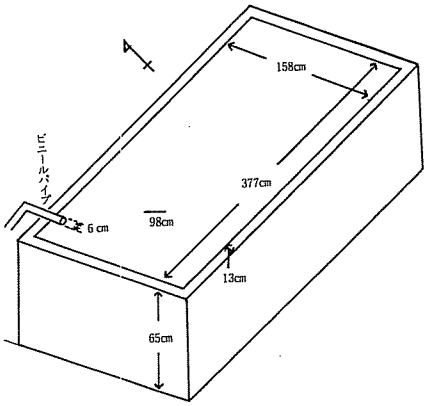


Fig. 18　A rough sketch of the water tank at Kaminaka

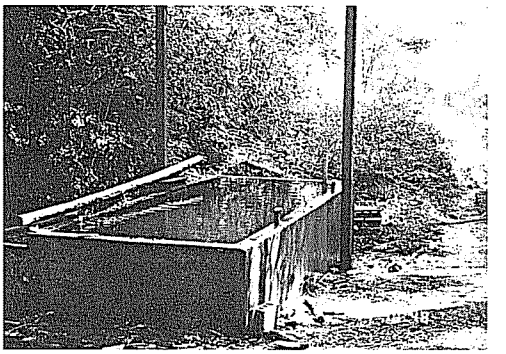


Fig. 19　The water tank at Kaminaka

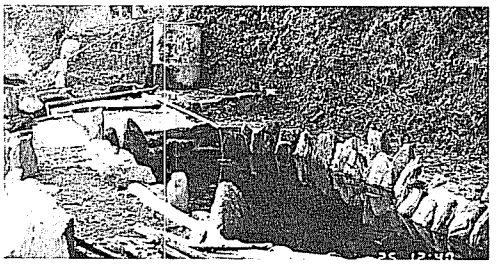


Fig. 20　The spring near Udo's

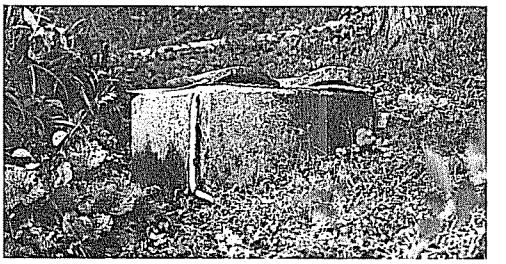


Fig. 21　The water tank near Udo's

３－５　田中　近家　　鹿本郡鹿北町岩野小字陣内

岩野小学校近くに湧き水があって，学校の帰り道よく飲んだものだったとの話を聞いて早速出かける。その湧水は田中近家のもので，道が坂になっているので道路より２ｍ弱下にある（Fig. 23)。湧水口はFig. 23のように小屋がけになっていて，「昭和58年９月10日改築（基礎コンクリート及び屋根)」と書かれた木札が柱に打ちつけられている。底はクリ石を敷きつめている。またビニールパイプ（径3.2cm）が３本入っている。以下田中和子さん（53歳）の話である。「私の所で使っています。特別な名称はなくただ“井川さん”と呼んでいます。由来も別にありません」。「利用しているのは上隣，下隣と私のところの３軒です。家庭用水として飲料水，洗いものすべてに使っています」ということであった。

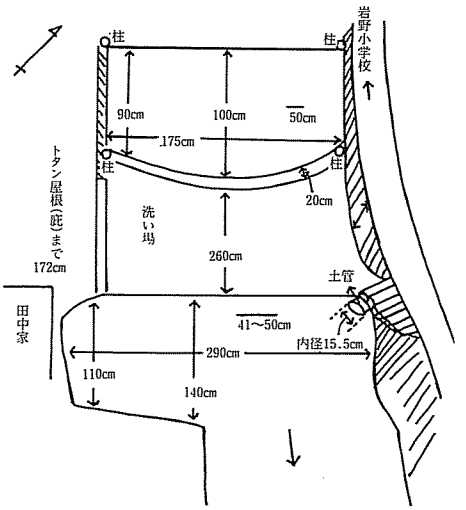


Fig. 22　A rough sketch of the spring at Tanaka's

なお洗い場をはさんで反対側にも，道路下の土管（水苔のついて土管かセンメント管かわからない）から水が湧き出ている（Fig. 24)。これは道路改修の際岩の間から噴き出したもので，水田用に引いたのだという。水はこちらの方が冷たいという話であった。それから国道３号線西側に水天宮さんがあるので，湧水のことを尋ねたところ，西側は水のない処だとの返事。水への願望が水天宮さんを祀ったのであろうか（Ｓ62・10・14)。採水は“井川さん”から。気温21.0℃，水温16.6℃（Ｓ62・11・25)。

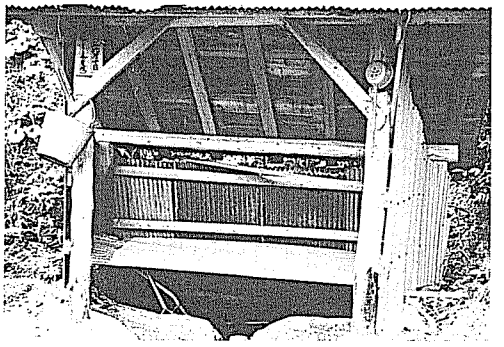


Fig. 23　The spring of Tanaka's

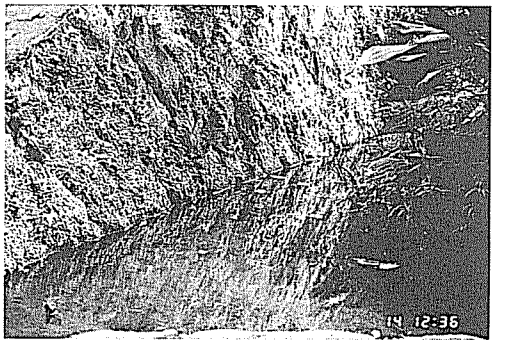


Fig. 24　The spring of Tanaka's

3－6　西牟田長家及び岩田清春家　　鹿本郡鹿北町岩野小字陣内

(ア)　西牟田長家

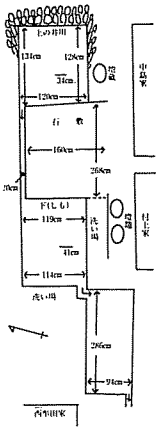


Fig. 25　A rough sketch of the spring at Nishimuda's

Fig. 26　The spring of Nishimuda's

Fig. 27　A gravestone at Nishimuda's

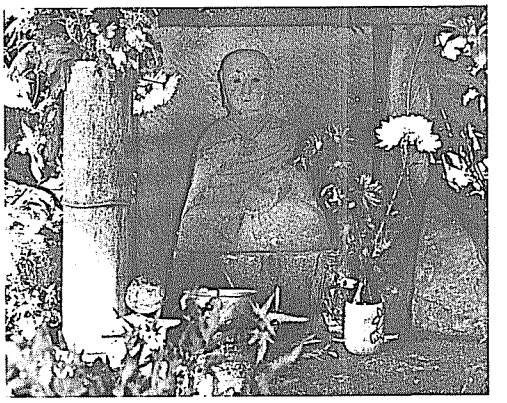


Fig. 28　A carved stone Buddist image at Nishimuda's

田中和子さんに徳泉寺跡にも湧水があると教えてもらう。お寺の跡といっても湧水口(Fig. 26）の近くにお墓や石仏（Fig. 27, 28）が残っている程度で，現在は西牟田長さんが家を建てて住んでおられる。西牟田ミユキさん（87歳）からいろいろと話を聞く。「湧水のいわれは知りません。なにかあるのではないかと思うんですが，知ってるのではと思われる方も岳間に移られましたし，お年が90歳をこえていられるので訪ねられても良く覚えてはいられないのではないでしょうか」。「湧水口は“井川さん”と呼んでいます。細長い洗い場ですが，水の湧いている方を上（かみ）の井川といって飲み水用です。お茶はこの水でなければと近所の方が汲みに来られます。下（しも）の井川は野菜類の洗い場です」。「私の家はこの水を生活全般に使用しています」といった話であった。水は澄み透っていて奇麗だなあと思わず呟いてしまうほど。水量も豊かである。岩田家の湧水とは隣接しているので，採水はここのをとる（S 62・11・25)。

(イ) 岩田清春家

岩田家は西牟田家のすぐ近くで，湧水口（Fig. 30）は家の後にある。ビニールパイプが２本入っているが，その中の一本は家に引いてあるが，パイプの端を底に伏せた茶碗の上にのせているのは底の土が混ざるのを防ぐためであろう。この様子から生活用水全般に利用していることが伺えるが，留守でなにも聞くことができなかった（Ｓ62・11・25)。なお岩田，西牟田，田中３家の湧水は横一線に列んでいる。

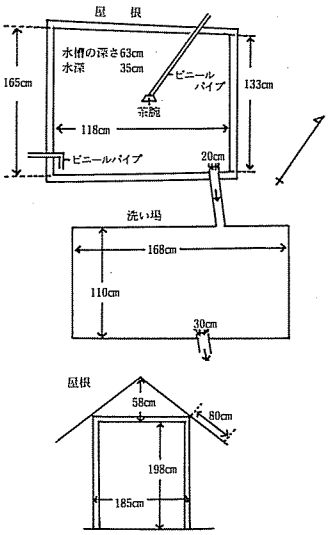


Fig. 29　A rough sketch of the spring at Iwata's

Fig. 30　The spring of Iwata's

３－７　枝川内（えだがわち）その他

鹿北町枝川内

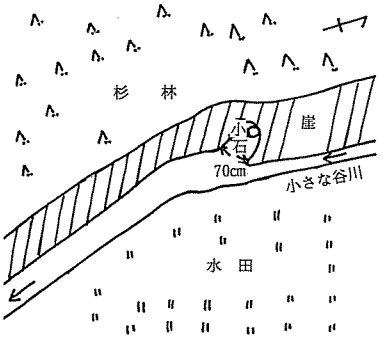


Fig. 31　A rough sketch of the spring at Edagawachi

Fig. 32　The spring at Edagawachi

枝川内集落の中山橋を渡り，１㎞程杉林の方角へ進んだ所にある（Fig. 32)。杉林と杉林とに挟まれたこの谷間を地元の人は「くちのつぼ」と呼んでいる。現在は水田に利用されているが，近くに農作業に来た時には飲むことがあるという。一帯の水田は圃場整備中でそこで働いていた酒井伝之（でんし）さん（68歳）に話を聞いた（Ｓ62・10・14)。枯れたことのない水

だそうで，この他にも随所で湧出しているという。水神祭は特にない。酒井さんの案内で他の湧水を見てまわった。浦方集落に通じる道路から400m程上った杉林の中にもあった（Fig. 33)。池の岸にコンクリート製の貯水槽があり，そこから10m程離れた崖下の湧出口からパイプで湧水を引いてあった。また，中山橋から55m程上流の中山川の川底からも湧出している（Fig. 34)。近くの井手口新吾さん所有のもので，川底にコンクリート製の貯水槽を作った珍しい形態の湧水である。

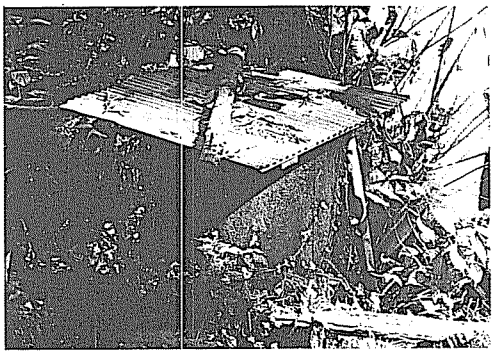


Fig. 33　The spring at Edagawachi

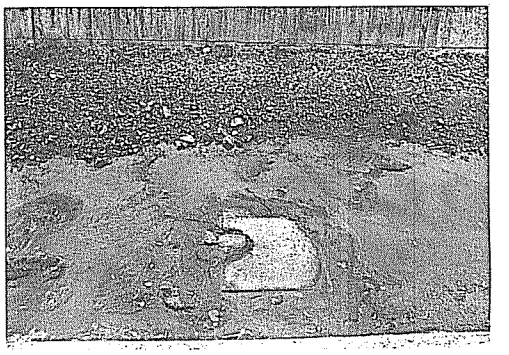


Fig. 34　The spring at Edagawachi

3－8　清水その他

鹿北町黒猪

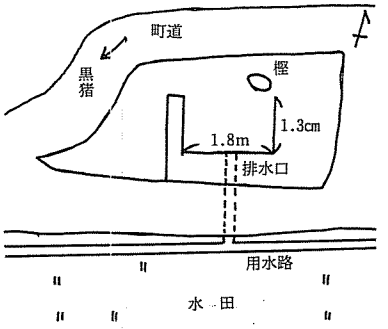


Fig. 35　A rough sketch of the spring at Shimizu

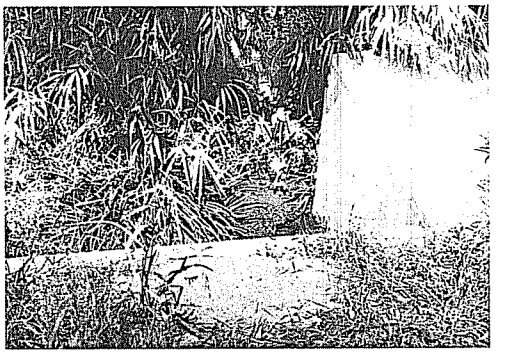


Fig. 36　The spring at Shimizu

黒猪集落に通じる町道横の樫の根元から湧出している（Fig. 36)。近くの水田で稲刈りをしていた中島捨男さんに話を聞いた（S62・10・14)。仕事に来て飲むことがあるが，水田に利用されているという。以前は樫の下を「馬道」といって木材の切り出しに使っていた道が通っていたそうだが，現在はコンクリートで仕切られていてその面影はない。しかし，樫にガラスのコップがかけてあり，今でも飲み水として利用されていることが分かる。祭りは特にないという。ここから100m程黒猪集落に行った水田にもある。井上繁光さんの水田だそうで，直径14cmのパイプが土中に立ててあった。10月に調査に訪れた時は自噴の水が冷たいせいかパイプ

の周辺だけがまだ稲が色づいていなかった。採水（Ｓ62・11・25）に訪れた時は稲刈りの終わった後だったが，湧水は枯れておらず湿田に近い状態であった。

３－９　妙見さんの井川さん　　鹿北町浦方

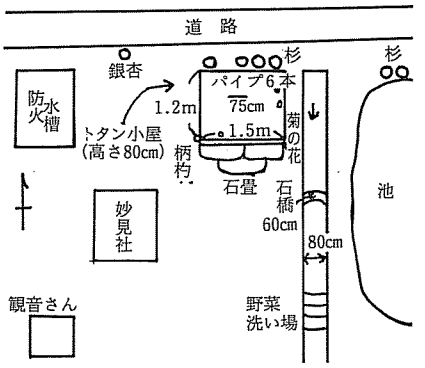


Fig. 37　A rough sketch of Myokensan-no-Igawasan

Fig. 38　The spring of Myokensan-no-Igawasan

浦方集落の妙見さんにある（Fig. 38）。トタン小屋で保護され，中には小魚が入れてあった。孫の子守りに来ていた村上まじうさん（88歳）に話を聞いた（Ｓ62・10・14）。６軒で利用していて，雨天の時は水量が増えるために濁ってしまうという。以前は第２の水前寺と呼び，池の周辺には松の大木が枝を巻いていて，秋にはもみじや銀杏の紅葉が美しかったらしいが，子供の安全のため池は浅く埋められ，松の大木は枯れたという。それでも，採水に訪れた時（Ｓ62・11・25）には銀杏の落葉がすばらしく往時の景勝が想像できた。10月11日に妙見さん祭があり，その日に清掃をするということである。村上さんは昔を思い出して歌を一つ口ずさんだ。「一の坂ひょろひょろ　下れば妙見さん　少し下ればなめのおっさばば」というもので，一の坂は妙見さんから山の方へ行った所にある坂の名前だそうで，急坂の意味であろう。「なめのおっさばば」というのは，以前妙見さんの下の集落に住んでいた女性を指し，うるさい老婆であったのでこんな歌ができたのだろうと笑って話してくれた。

３－10　須屋　　鹿北町須屋

須屋集落に行く道路の右手の杉林の中にある。全体がコンクリートで覆われ，耳をあてると水の音がした（Fig. 40, 41）。折りよく工事に来ていた水道工事業を営む古川誠志さん（45歳）に話を聞いた（Ｓ62・10・14）。鹿北町の簡易水道水源であり，200軒程に供給されているそうだ。10年前コンクリートをうつまでは山葵園だった所で，岩が見えていたという。どんな旱魃でも枯れたことはないという話であった。

須屋集落の上には星原（ほしわら）の集落がある。良質の茶の生産で有名な地区で，藩政時

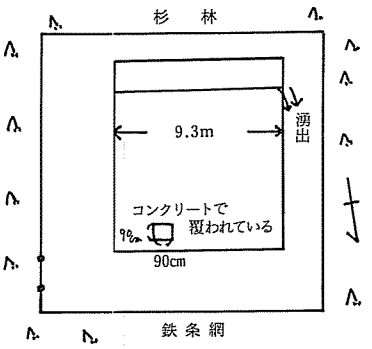


Fig. 39　A rough sketch of the spring at Suya

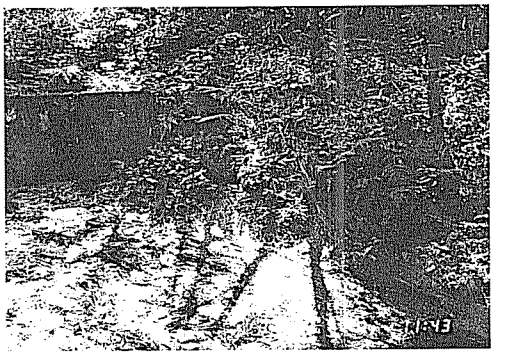


Fig. 40　The spring at Suya

代には，毎年「御前茶」と称して熊本城まで役人の警護付きで献上していた。星原峠へと続く村内の道路は福岡県の矢部村に通じる要路であったが，現在は往来する車も稀である。

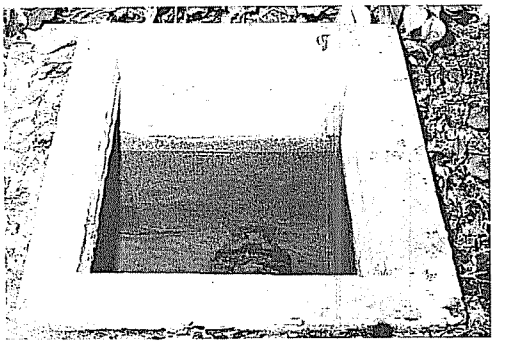


Fig. 41　The spring at Suya

3－11　茂田井（もたい）

鹿北町茂田井

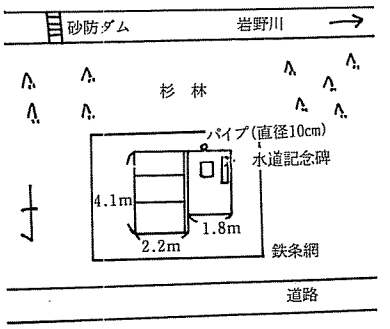


Fig. 42　A rough sketch of the spring at Motai

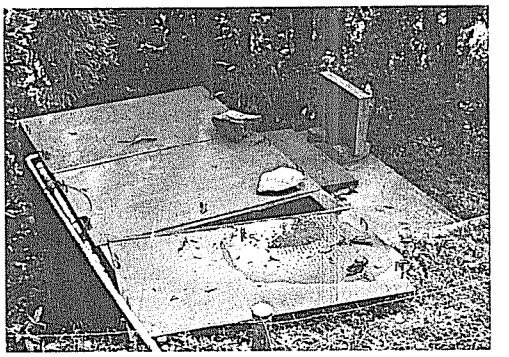


Fig. 43　The spring at Motai

茂田井集落の岩野川右岸にあり，三つに仕切られた貯水槽は鉄条網に囲まれている（Fig. 43)。底には小石と炭が入れてあり，浄化作用が効率よく行われる工夫がしてある。側に昭和52年７月に建立された水道記念碑があった。それには次のように記されている。

この水道は当初昭和三十四年二月上組中組一部の飲料水として発起人大渕芳人世話人堀江延

雄，中野磨　中野秀男氏等の計画により水源地下に貯水タンクを建設し，当時受益者の労力奉仕により総工費二十万円で完成　昭和三十六年二月下組十三戸の加入要請があり埋管工事等も自らの労力奉仕により完成　総工事費十三万円　昭和四十八年十月建設省の砂防ダム建設が計画され貯水タンクが水没する事になり現在地に移転をよぎなくされた　当時補償金百四十一万八千円　昭和四十九年二月貯水タンク建設に着工　四月に完成　昭和五十年十一月より送水管取替工事に着手　同年十二月完成し全戸に送水された　移転建設総工事費百四十六万円　受益戸数二十九戸

貯水槽に設けられたパイプからは水がかなりの量流出していたので，移転後も水量は十分あると推測できる。ここから２㎞程下った堀江延雄さんの家のにもあった（Fig.44)。上に畑があり，石垣の間から湧出していたが，雨の日に雨水が混じることがあるので，上記の水道施設が完成して以来利用しなくなったそうである。現在は防火用水に使われている。茂田井集落に至る途中には岳間渓谷があり，夏には涼を求める人で賑わう。渓谷近くの崖からも随所で湧出していて，竹の樋やパイプがさしてあった（Fig.45)（Ｓ62・10・14)。

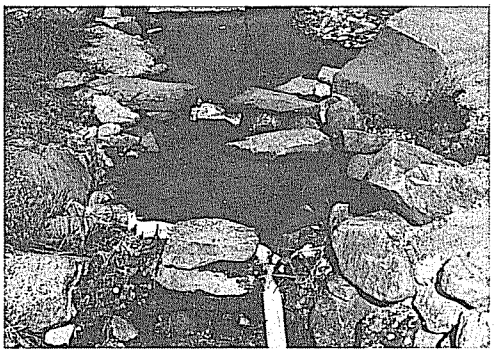


Fig.44　The spring of Horie's

Fig.45　The spring at Taku

３－12　荒平その他

鹿北町荒平

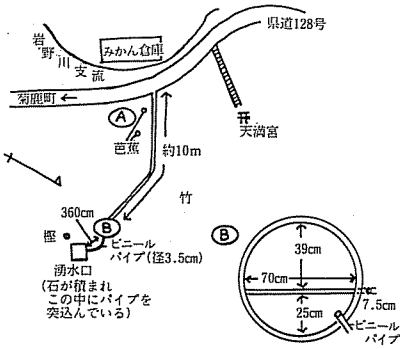


Fig.46　A rough sketch of the spring at Arahira

Fig.47　The spring at Arahira

県道128号線の荒平峠付近に三カ所ある。その一つは天満宮の側にあり，竹林の中の湧出口はトタン板で覆ってある（Fig. 47)。弓掛緑さん（50歳）の家１軒で利用している。弓掛さんの話では，２月頃少し減るものの雨天でも濁らずよい水だそうである（S 62・10・14)。水量は多くなく，洗濯の時は不足する時もあるという。近所には沢水を利用している家があり，雨の時は弓掛さんの家に水をもらいに来るという話である。そこから荒平峠へ200m程行き，集落へ入る道を右折した崖の下ある（Fig. 48)。地元の人は「かなあな」と呼んでいる。石で保護されており，柄杓やおちょこが置いてある。地元の人の話では，以前はここに汲みに来たり，そうめんやスイカを冷やしたりした所だそうである（S 62・10・14)。「かなあな」という名称からは鉱物を掘った穴の意味が考えられるが，聞き取り調査では裏付けられなかった。

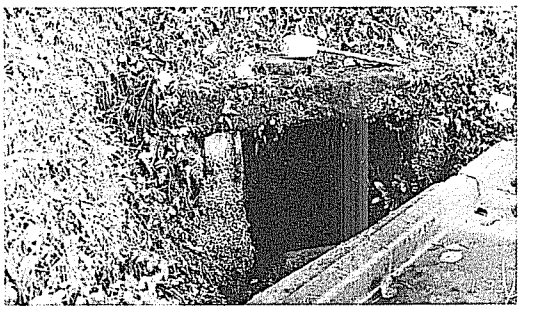


Fig. 48　The spring of Kanaana

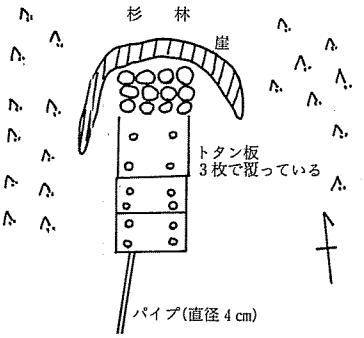


Fig. 49　A rough sketch of the spring at Arahira

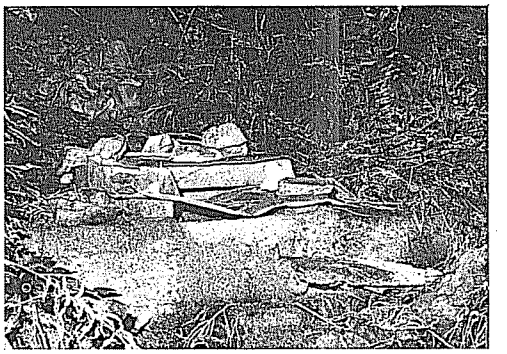


Fig. 50　The spring at Arahira

荒平峠の菊鹿町との境界線近くの杉林の中にもある（Fig. 50, 51)。杉林の崖下の岩の間から湧出しているらしく，覆ってあるトタン板に耳をあてると水の音がした。谷川沿いに三つの貯水槽が設けられている，弓掛さんの話では，雨天の時も濁らないそうである。10月にこの地区では水道まつりが行われ，タンクの清掃をするという（S 62・10・14)。

Fig. 51　The water tower at Arahira